社会連携推進センターLetter　令和７年９月２４日発行

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 18

編集発行：武庫川女子大学　社会連携推進センター

目次

専門学校の日本語クラスを訪問
【　日本語日本文学科　】……1P
「第５回 歴史文化講座　歴史文化学科のこれまでとこれから」を開催
【　歴史文化学科　】……1P
清水利宏教授が「三重県高等学校英語教育研究会」で英語スピーチ教育について講演
【　英語グローバル学科　】……2P
鳴尾いちごを育てる教育学科の学生が小学生といちご狩りを体験
【　教育学科　】……2P
不登校生徒の居場所づくりで兵庫県警に協力する心理コースの学生がボランティア委嘱式に臨む
【　心理・社会福祉学科（心理学科）　】……3P
社会福祉学科「在学生・卒業生交流会」を開催
【　社会福祉学科　】……3P
中堀ゼミが「アルコ神戸」のフィジカル測定を実施
【　健康・スポーツ科学科　】……4P
大阪・関西万博のステージで、学生がインクルーシブダンスを披露
【　健康・スポーツ科学部（健康・スポーツ科学科、スポーツマネジメント学科）　】……5P
三宅ゼミが西宮市 100 周年記念イベントでオリジナルカレンダーづくりのブースを出展
【　生活環境学科　】……5P
大森ゼミの生たちの企画が大阪・関西万博で展示
【　社会情報学科　】……6P
第２回全国学生パイコンテストへの挑戦
【　食物栄養学科　】……7P
老舗米穀会社「阪神米穀」との産学連携プロジェクトで開くおむすびショップ「MUSU」がプレオープン
【　食創造科学科　】……7P
トルコのバフチェシヒル大学からの留学生 8 人が西宮市長を表敬訪問
【　建築学科　】……8P
４年生有志が「芦屋オープンガーデン」および「一家一花運動～玄関先に一花を～」の PR チラシを作成
【　景観建築学科　】……8P
「YB ファブのナツフェス！」に企画・運営で参加
【　音楽学部　】……9P
浜甲子園団地で「おクスリ相談会と健康イベント」を開催
【　薬学科　】……9P

日本精化株式会社を訪問
【　健康生命薬科学科　】……10P
グッドホールディングス株式会社及び株式会社リヴァクスを訪問
【　環境共生学科　】……10P
「老年看護学Ⅱ」の授業で、高齢者交流と高齢者疑似体験の２種類の演習を実施
【　看護学科　】……11P
経営学科の学生たちが考案したパズル型のレターセットが発売され、体験ワークショップを開催
【　経営学科　】……12P
「新しい自分発見イベント」で警察の仕事に触れる
【　共通教育部　】……13P
鳴尾高校硬式野球部を対象に、学科横断型のクラブ活動支援を実施
【　健康・スポーツ学科/食創造科学科　】……13P
「住環境×心理学でウェルビーイングを考える」生活環境学科で公開講演会実施
【　生活環境学科 / 心理学科　】……14P
薬学科と看護学科との合同授業が本学で初めて実現
【　薬学科/看護学科　】……14P
本学の産学連携プロジェクト「ローソンプロジェクト」で、学生と高校生が店舗建設候補地の明舞団地（神戸市・明石市）を視察
【　経営科 / 本学附属高校等　】……15P
大阪・関西万博で、関西５大学による「健康・ウェルビーイング」に関する提案があり、薬学部６年の大黒香奈さんが登壇
【　薬学科　】……16P
甲子園会館が大阪・関西万博に出展している「ミライ人間洗濯機」内部上映映像のロケ地に
【　甲子園会館　】……17P
社会人の学び直しについて考えるフォーラムで、高橋千枝子センター長が講演
【　リカレント教育センター　】……17P
国際ソロプチミスト西宮から「児童福祉研究部」に支援金
【　児童福祉研究部　】……18P
ダンス部がフランス・リヨンで開催中の「Camping 2025」に招待されダンスで国際交流
【　ダンス部　】……18P
ブラウンライスボランティアが、WTW 大阪を第１回目からボランティアとして運営をサポート
【　ブラウンライスボランティア　】……19P
キッザニア甲子園を企画・運営する KCJ GROUP と包括連携協定を締結
【　武庫川女子大学　】……19P
「ジェンダーを超えて未来を拓く！キッザニア甲子園で MUKOJO ミライ☆ラボ「Girls’ Day/ Boys’ Day」開催
【　女性活躍総合研究所　】……20P
研究所棟をライトアップする「Light It Up Blue MUKOJO! 2025 ～武庫女を青く照らそう～ 」を開催
【　臨床教育学研究科　】……21P

参考資料〈持続可能な開発目標（SDGs）の詳細〉　……22 P

社会連携推進センターLetter　　令和７年９月２４日発行

-地域と大学を結ぶ- りえぞん No. 18

編集発行：武庫川女子大学　社会連携推進センター

充実する本学の地域連携活動

本学では、社会連携の活動が次第に数を増し、また継続的な活動も行われています。新しい活動の中には学部の垣根を越えた取り組みも見られます。その中の際立った活動の概要を以下に紹介します。

グループに分かれて親交を深める

参加者全員で記念撮影

【 日本語日本文学科 】

専門学校の日本語クラスを訪問

7 月 11 日（金）、野畑ゼミ（野畑理佳准教授）・林ゼミ（林貴哉講師）の 3 年生 21 名が YMCA 国際専門学校の日本語クラスを訪問し、国際ホテル学科、国際ビジネス学科で学ぶ 50 名の留学生との交流を行った。

留学生はミャンマー、ネパール、ベトナム、スリランカ、バングラデシュ、ガーナ、中国、香港出身。留学生はとても日本語が上手で、中には関西弁も飛び交っていた。

野畑ゼミの 3 年生からは「若者言葉を紹介した際、YMCA 国際専門学校の皆さんは興味を持って真剣に聞いてくださり、教える側としてとても嬉しかったです。また、ミャンマーの言語を丁寧に教えてくださいました。初めは皆、緊張していましたが、プライベートな話もでき、最後はとても楽しい雰囲気で交流をすることができました。」との感想があった。

【 歴史文化学科 】

「第 5 回 歴史文化講座　歴史文化学科のこれまでとこれから」を開催

6 月 1 日（日）、歴史文化学科主催「第 5 回歴史文化講座」を開催した。テーマは「歴史文化学科のこれまでとこれから」。

2024 年 4 月に、これまで史学系の学科を持っていなかった本学に歴史文化学科が誕生した。

当時の文学部長として新学科立ち上げに尽力してきた影山尚之教授による基調講演が行われた。タイトルは「武庫の浦の賑わい～武庫女に歴史文化学科が出来たワケ～」。

本学のある武庫川周辺のエリアは、日本書紀や万葉集など古くから文献に名前が登場する歴史のある土地であること、いまでもその痕跡がキャンパス周辺の様々な場所で見られること、そして、そのような歴史ある場所に「歴史文化学科」が誕生したことを影山先生の専門である日本文学から抜粋しながら紹介された。また、学科開設までの流れや当時の苦労話などのお話もあった。

影山教授の軽妙なトークに、会場からは笑い声も起こっていた。

その後の座談会では、歴史文化学科長の武藤康弘教授、司会の竹内亮教授も加わり和やかに懇談が行われた。

影山尚之教授(中央)　歴史文歴史文化学科長の武藤康弘教授(左)
司会の竹内亮教授(右)

【 英語グローバル学科 】
清水利宏教授が「三重県高等学校英語教育研究会」で英語スピーチ教育について講演

三重県の高校英語教員で組織する三重県高等学校英語教育研究会が主催する春季研究会が 6 月 3 日（火)、三重県総合文化センター(三重県津市)で開催され、文学部英語グローバル学科 グローバル・コミュニケーション専攻の清水利宏教授(英語スピーチ・プレゼンテーション研究室)が講演した。

清水教授は、「英語スピーチの教え方・学び方：これまでの 10 年・これからの 10 年」の演題で、AI 時代を勝ち抜くための「英語スピーチ教育の本質的課題」について、多くの実例を紹介しながら解説。過去 10 年間の象徴的変化として生成 AI の登場を挙げ、その実演を交えながら、スピーチ教育における AI の戦略的活用の重要性を示した。一方、今後の 10 年を見据えた「不易の本質」として、話者の誠実さと人間力がますます重要になると述べた。

講演に参加した約 50 名の現役英語教員からは、「授業にスピーチをとりいれるための具体的な方法が分かった」、「AI と共に生きていくことが前提となる中で、誠実さの重要性を改めて認識できた」といった声が聞かれた。

講演を終えた清水教授は「どれだけ時代やテクノロジーが進化しても、スピーチは話者と聴衆の人間的共鳴によって成り立つ芸術です。高校英語教育の最前線に立つ先生方から、話者の誠実さがいかに大切かを生徒に伝えてもらえるとうれしいです」と話している。

清水利宏教授(英語スピーチ・プレゼンテーション研究室)の講演

【 教育学科 】
鳴尾いちごを育てる教育学科の学生が小学生といちご狩りを体験

地域教材の一つとして、「鳴尾いちご」を学校教育館の屋上で栽培する教育学科に 4 月 28 日（月)、西宮市立鳴尾小学校の 2 年生児童が訪れ、いちご狩りを楽しんだ。

鳴尾地域では、明治後期から昭和初期にかけて、いちご栽培が盛んだった歴史がある。

今年は、教育学科・酒井達哉教授のゼミに所属する 3、4 年生 20 人が 560 株を育てた。昭和 30 年代に宝塚市で交配された「宝交早生（ほうこうわせ)」という品種で、果肉がやわらかく、傷みやすいため、市場にあまり出回らないもの。

いちご畑に着いた小学生 43 人は、いちごの花や、まだ青い果実に興味深々。熟していない粒も多かったため、一人２粒までの制限付きで、摘み取った。女子児童は、「大物が取れたよ！」と、手のひらに赤い粒をのせてほほ笑み、「おうちで食べたのとは別の種類だけど、甘くておいしかった」と感想を話していた。

いちご狩りと合わせて、教員を目指す大学３年生から、地元の名所「甲山」や「甲子園球場」について学び、「いちごの〇×クイズ」でも盛り上がった児童たち。元気いっぱいの児童と触れ合った学生も満足そうだった。教育学科３年の横田瑞樹さんは、「鳴尾いちごの歴史を、子どもたちに楽しく知ってもらえたら」と語った。

教育学科が屋上で栽培する「鳴尾いちご」はパフェとスムージーとして、食堂「ENSEMBLE（アンサンブル)」のメニューに登場している。鳴尾いちごのメニューが学内で販売されるのは初めての試みである。収穫量が年間約 50 kgにもなるのでいちごの新たな活用方法としても期待される。

いちご狩りを楽しむ鳴尾小学校の児童

「鳴尾いちごパフェ」アンサンブルにてお楽しみください

【 心理・社会福祉学科 】

不登校生徒の居場所づくりで兵庫県警に協力する心理コース学生がボランティア委嘱式に臨む

不登校生徒の居場所づくりに取り組む兵庫県警の西宮少年サポートセンターと甲子園警察署の呼びかけを受け、心理・社会福祉学科心理コース４年生および心理学科 3 年生の 20 人が、ボランティアで参加することになり、7 月 29 日（火）にボランティア委嘱式が行われた。

活動は、兵庫県警察本部生活安全部少年課西宮少年サポートセンターと甲子園警察署が取り組む「不登校生徒の居場所づくり支援」の一環で行われる。不登校生徒に対し、継続的な支援活動を求める声を受け、「中学校に教室とは別の居場所を作ろう」という取り組み。

学生からは「心理専門職を目指しているので、ボランティア活動を通して学んだことを将来に活かしたい」「生徒たちが安心して過ごせる居場所作りに貢献したい」と意気込みが語られた。活動は 9 月からスタートする予定。

委嘱式冒頭のご挨拶

【 社会福祉学科 】

社会福祉学科「在学生・卒業生交流会」を開催

社会福祉学科で 7 月 12 日（土）、「在学生・卒業生交流会」が開催された。今回の交流会では、福祉機関や医療機関、行政や民間企業等で働く卒業生 47 名が参加し、自らの体験を在学生に語り掛けた。

参加した在学生 67 名は卒業生から仕事の様子、やりがい、国家試験対策や就職活動の方法等在学期

間中の過ごし方を熱心に聞き、積極的に質問。「就職や実習についての話を聞く事ができた」「大変なこともあるけど、誰１人同じ患者さんはいないから毎日新しいことばかりで楽しいよという話が印象的でした。」といった声が聞かれた。

その後に行われた卒業生同士によるホームカミングでは、仲間との再会に大いに盛り上がった。教員の声掛けや卒業生同士の呼びかけで久しぶりに本学に戻ってきてくれた卒業生もおり、同じ志を持って大学で勉強した仲間やゼミ教員と語り合い、仕事や生活に対する向き合い方を再認識していた。

先輩から心構えや準備について親身に教えてもらう

先生を交えて全体的傾向やこれまでの背景的状況の説明を受ける

【 健康・スポーツ科学科 】
中堀ゼミが「アルコ神戸」のフィジカル測定を実施

健康・スポーツ科学科の中堀ゼミでは５月 18 日（日）、「アルコ神戸」を本学に迎え、2025 シーズン開幕直後の選手のフィジカル測定を実施した。

アルコ神戸は 2008 年に神戸市で創設され、日本女子フットサルリーグの初代女王に輝いた日本を代表する女子フットサルクラブの一つ。全国大会でも優勝を重ね、「神戸の街をフットサルで盛り上げていく」をモットーに活動を展開している。

今回の連携は、クラブに在学生が所属していること、監督が本学 OG であることを背景に実現した。全国クラスで活躍する女子アスリートを対象に、学生が直接支援に関われるという貴重な実践機会であり、学生にとっては、学内で学んだ理論を現場で生かす実践教育の場となった。

測定では、スピード・アジリティ、ジャンプ力、間欠性持久力など、競技パフォーマンスに直結する体力要素を、本学のリソースである測定機器を活用して多角的に評価。ゼミ内では、事前に測定方法やデータ処理法を検討し、選手へのフィードバックまで見据えて準備を重ねた。当日は、測定・機器操作・記録・説明まで、すべてを学生が担当した。

今後は、シーズンを通じての定期的な測定とフィードバックを継続的に実施する予定。選手の体力や運動能力を客観的に把握し、怪我の予防やトレーニング内容の最適化、コンディショニング管理に貢献していくことが期待される。学生からは「より効率的な運営」「計測精度のさらなる向上」といった前向きな課題も挙がっており、継続的な活動の中で質の高い支援体制の構築を目指して取り組んでいく。

ジャンプする選手のデータを採取中

測定について学生の説明を真剣に聞くアルコ神戸の選手たち

【 健康・スポーツ科学部（健康・スポーツ科学科、スポーツマネジメント学科）】
大阪・関西万博のステージで、学生がインクルーシブダンスを披露

大阪・関西万博の EXPO アリーナ「Matsuri」で 8 月 7 日（木）、「こどもミライ祭り」（主催:キッザニア）が開かれ、学生が大阪府内の特別支援学校の児童生徒らとともに、万博のオフィシャルテーマソング「この地球の続きを」にのせて、インクルーシブダンスを披露した。

こどもミライ祭りは、こどもの職業・社会体験施設「キッザニア」を運営する「KCJ　GROUP」が主催するイベント。5 月に本学との包括連携協定締結を機に、スポーツマネジメント学科・豊永洵子講師のゼミ生が「TEAM　EXPO　Dance アンバサダー」に任命され、障がいの有無にかかわらず楽しめるダンスの振り付けを考えた。

当日、学生たちはピンクの T シャツに身を包んで笑顔で登場。ステージ下で、キッザニア甲子園のダンスチーム「Zany8」とともに、観客に振り付けのレクチャーを行った。大人もこどもも一緒に笑顔で、テーマソングの歌詞にあわせて身体を揺らし、温かい雰囲気に包まれた。

本番では、ステージにミャクミャクも登場。約 100 人が盆踊りやスイカ割りといった夏を連想させる動きを取り入れたインクルーシブダンスで会場を沸かせた。4 年の佐藤彩音さんは「みんなで楽しく踊ることができて大成功です」と話し、4 年の山本有希さんも「お客さんも一体となって、楽しい雰囲気を作ることができました」と達成感を見せた。

EXPO アリーナ「Matsuri」にて

観客も巻き込んで大盛りあがり

パフォーマンス後万博会場の楽屋にて

【 生活環境学科 】
三宅ゼミが西宮市 100 周年記念イベントでオリジナルカレンダーづくりのブースを出展

西宮浜総合公園で西宮市 100 周年記念事業「たのしみや、にしのみや」フェスティバルが、開催され、生活環境学科の三宅ゼミ（三宅正弘教授）の学生が、レクリエーション広場でオリジナルカレンダーづくりのブースを出展、70 人以上の来場者で賑わった。

参加者がカレンダーを自由にデコレーションできるワークショップで、ゼミの学生 11 人がエントリーから設営まですべて自分たちで企画。学生はブースに西宮市のキャラクター「みやたん」や色とりどりのペン、手作りのオリジナルスタンプなどを用意。参加した子どもたちはひとりずつ学生とペアになってカレンダーづくりに取り組み、スタンプやイラストを使って自由にデコレーションして楽しんだ。

ゼミの学生たちは、日ごろから暮らしにまつわる生活デザインを学んでおり、デザインを地域貢献に活かす方法を探っている。参加者は完成した作品を手に学生たちと記念撮影し、大切そうに抱えてお土

産に持ち帰った。参加した小学３年生は「かわいいスタンプがたくさんあったので、いろいろなアイデアが浮かびました」と話していた。

ブース設営中の学生

カレンダーづくりを楽しむ参加者達

【 社会情報学科 】
大森ゼミの学生たちの企画が大阪・関西万博で展示

大阪・関西万博で７月２日（水）から７月６日（日）まで展示される「お菓子で世界にスマイルプロジェクト」で、社会情報学科大森ゼミ（大森いさみ教授）の学生たちが企画した「お菓子神社」と「お菓子みくじ」が展開された。

「お菓子で世界にスマイルプロジェクト」（所在地：大阪府摂津市、代表：神吉一寿）は、日本のお菓子を伝統文化の一つと捉え、魅力と可能性を伝えるとともに、お菓子の力で笑顔になってもらうことを目的とし、過去・現在・未来のゾーンに分けて日本のお菓子メーカー約 50 社が力をあわせ、日本のお菓子を見る、触る、食べるという体験を大阪・関西万博で提供するプロジェクトである。

大森ゼミでは、この産学連携プロジェクトに参加し、おみくじという伝統的なメディアと、お菓子を組み合わせた企画を提案。昨年 12 月と今年２月に、パイロットイベントを学内外で実施し、その成功を受けて万博での展示が決まった。「お菓子みくじ」の文面も学生のアイデアがほぼそのまま採用されて、多言語で展開されている。

７月３日（木）に万博会場を視察した学生たちは、「自分たちの手作りでスタートした企画がバージョンアップして万博の会場でそのまま実現した感じになっていて、感激しました」「パイロット企画では、学生やファミリー層を対象にした実施でしたが、万博会場では大人の人たちが、おみくじと記念撮影をしたりして、楽しんでくれている姿をみて、とてもうれしかったです」と話していた。

お菓子神社の前で

おみくじは英語も併記されている

高大連携

【 食物栄養学科 】

第２回全国学生パイコンテストへの挑戦

食物栄養学科と兵庫県立鳴尾高等学校は高大連携事業の一環として、「第２回全国学生パイコンテスト」に挑戦することになり、６月２１日（土）、本学の施設「食考房」で応募作品を作製した。

食物栄養学科の有志１０名の学生と鳴尾高等学校のハンドメイド部の１、２年生８名の生徒が参加し、それぞれ１～３名程度のグループを組み、大学４グループ、高校生３グループで作品づくりに挑戦した。

食考房は色・形が美しい様々な食器が揃っており、食器に沿える花等の飾りや作った料理を綺麗に撮影出来るよう照明器具があり、コンテストの応募には恵まれた施設である。テーマは「記念日」。グループごとに食材をそろえ、パイ生地をカッティングし、三つ編みにしたり、折り紙のように折ったりしながら作成した。パイ生地に入れる具材はかぼちゃを甘露煮のように甘く味付けしたり、おかずパイを作るグループはカレールーを作成した。グループによっては、パイ生地を焼いてから綺麗に飾り付けるグループがあったり、甘いケーキのようなパイやおかず風のパイなど色とりどりのパイが出来上がった。

作成後には作品について、込められたコンセプトや食材にまつわる興味深いストーリーが披露され、高校生・大学生共に関心を持ちながら聞き入った。

参加した学生は「学生・生徒同士が作品を披露し、学び合いながらパイ作りの楽しさを実感し、様々な視点を共有する良い機会となった」、生徒は「充実した設備のもと、仲間と楽しく試作が出来て良かった」と話していた。

オリジナリティ溢れる作品

参加者と作品

【 食創造科学科 】

老舗米穀会社「阪神米穀」との産学連携プロジェクトで開くおむすびショップ「MUSU」がオープン

阪神米穀株式会社（本社・西宮市）と食創造科学科の産学連携プロジェクト、おむすびショップ「MUSU（ムス）」が７月 14 日（月）、西宮市にプレオープンした。店頭には、梅や昆布、おかかといった定番８種と、酒粕と鮭を使った「西宮ダブル鮭おむすび」、ベーコンや卵黄、チーズを組み合わせた「天使のおむすび」といった学生考案８種の計 16 種類のおむすびが並び、初日から多くのお客さんでにぎわった。

MUSU は、学生が商品開発だけでなく、調理、接客、売り上げ分析、SNS での情報発信など店舗運営に関わっている点が特徴。店舗の外壁には、写真スポットが設けられ、購入したおむすびをスマホで撮って投稿したくなる仕掛けも。ショーケースには、おむすびの説明とカロリー、アレルギー表示も記され、選ぶ楽しさもあり、一人目のお客さんとなった女性は、「まずは塩むすびを試したい。学生さんのおすすめのつくねむすびも買ってみました」と話した。近所に住んでおり、開店を心待ちにされていたそうだ。

価格帯は、200～280 円（税込み 216～302 円）。阪神米穀株式会社の田中隆社長は、「若い世代に米の魅力を知ってもらい、学生の実践的な学びにも貢献したい。西宮地域、人とのつながりを結ぶ店舗にしたい」と。学生執行部代表の３年、中島朱里さん

は、開店準備に汗を流しながら「おいしさには自信があります。学生ならではの若さとフレッシュさでお客さんをお迎えしたい」と話している。

プレオープンを経て、22 日（火）からがグランドオープン。JR 西宮駅から徒歩２分の好立地。学生自慢のおむすびをぜひ味わってもらいたい。

店頭看板の前で

お買い上げありがとうございます

【 建築学科 】

トルコのバフチェシヒル大学からの留学生８人が西宮市長を表敬訪問

建築学科は 2009 年より、短期留学生受け入れプログラム「ICSA in Japan」を実施。今年度もトルコ・イスタンブールのバフチェシヒル大学建築デザイン学部の学生８人が７月５日（土）に来日し、若草インターナショナルハウスに滞在して７月 27 日（日）まで建築学部の授業に参加した。

７月 14 日（月）には、トルコの学生８人と引率のシネム先生、本学建築学科の柳沢和彦教授と山本親教授が西宮市役所を表敬訪問し、石井登志郎市長と懇談。石井市長は歓迎の言葉とともに西宮市の特長を紹介した。

学生８人は一人ずつ自己紹介を行い、日本の印象や西宮市に住んでいる感想などについて話し、対話の中では特に、町がきれいなことについて話が盛り上がり、活発な質疑が交わされ、貴重な国際交流の機会となった。

バフチェシヒル大学の留学生と石井登志郎市長

【 景観建築学科 】

４年生有志が「芦屋オープンガーデン」および「一家一花運動～玄関先に一花を～」の PR チラシを作成

芦屋市と本学が締結する包括連携協定に基づき、芦屋市都市政策部道路・公園課が、景観建築学科に対し、「第 20 回　芦屋オープンガーデン 2025」の PR チラシと「一家一花運動～玄関先に一花を～」の啓発チラシ作成を依頼。４年生の有志７人が取り組んだ。

７人は、１月から３月にかけて話し合いや試作を重ね、２種類のチラシを完成させた。オープンガーデンのチラシでは、学生が庭の模型を作り、写真撮影したものをデザインに取り込み、花と緑あふれる庭を介して生まれる人と人のつながりを表現している。

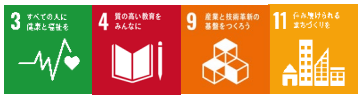
これらのチラシは４月３日（木）から２週間、また５月７日（水）から２週間にわたり、芦屋市

内の広報掲示板 77 カ所で掲示されるほか、芦屋市のホームページにも掲載される。

参加学生とポスター

【 音楽学部 】

「YB ファブのナツフェス！」に企画・運営で参加



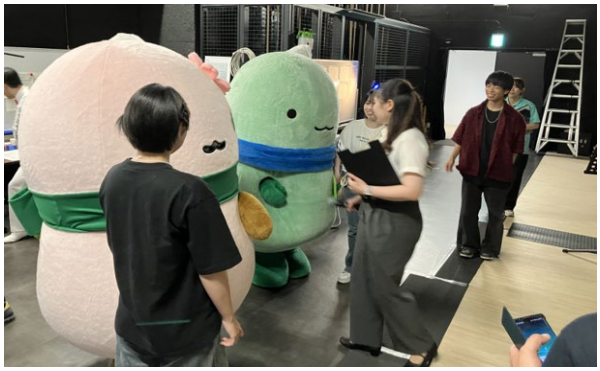
兵庫県養父市のやぶ市民交流広場で「YB ファブのナツフェス！」が 7 月 20 日（日）に開催された。「音楽活用実習」を履修する応用音楽学科 4 年生の学生たちは、この日に向けてさまざまな企画を立てて準備を進め、当日は養父市の方々と協力してイベントを運営。たくさんのプログラムの中で、「やっぷー&やっぴー音楽合戦」では演奏者として出演するとともに、司会進行なども務める。着ぐるみの「やっぷーとやっぴー」に扮するのも学生である。全員の演奏後、やっぷーとやっぴーの絵が描かれたうちわで投票が行われ、「やっぴーチーム」が最多投票を得た。

朗読と演奏の企画では、学生がプロコフィエフ作曲・原作『ピーターと狼』の朗読と絵を担当し、プロの演奏家「こうの TRIO」によるヴァイオリン、ピアノ、フルートの演奏とともに物語が進んでいった。

他にも、別室で行われた紙皿を使った楽器作り体験が大盛況。

コンサートドレスを着られるコーナーでは順番待ちの列ができ、訪れた子どもたちがポーズを決めて、楽しそうに写真に納まっていた。

学生たちは一人ひとりが何役もこなし、貴重な経験を積んだ一日となった。


着ぐるみの「やっぷーとやっぴー」に扮するのも学生

大人気のコンサートドレスコーナー

【 薬学科 】

浜甲子園団地で「おクスリ相談会と健康イベント」を開催

薬学科が西宮市薬剤師会、UR 都市機構との共催で、一般の方々を対象にした「おクスリ相談会と健康イベント」を 5 月 10 日（土）、UR 住宅浜甲子園団地で開催。

薬学科では西宮市薬剤師会と共催し、毎月第二・四土曜日に「おクスリ相談会」を浜甲子園キャンパ

スで実施している。今年度二回目の開催に当たる当日は、キャンパスを飛び出し、近隣の浜甲子園団地で相談会を開催。通常の西宮市薬剤師会所属の薬剤師による「薬と健康相談会」に加え、株式会社トータルブレインケアによる「脳体力チェック＆トレーニング」や東和薬品株式会社による「認知機能テスト」、日本介護美容セラピスト協会による「ハンドケア」など、企業の協力を得て来場者参加型の健康イベントを実施した。

団地の住民の方々を中心に来場者が集まり、参加者には、薬学部が企業と共同で開発した本学オリジナル化粧品「MUKOism」のハンドクリームとタオルが贈られた。

「脳体力チェック」と「ハンドケア」コーナー

「認知機能テスト」コーナー

【 健康生命薬科学科 】
日本精化株式会社を訪問

6 月 5 日（木）、化粧品の原料を開発・製造する日本精化株式会社の The Design & Creation Lab. を訪問した。

化粧品は、多くの会社の協働で成り立っている。日本精化は「化粧品の原料を作る」役割を担っており、肌に良くまた使い心地の良い成分等化粧品の多様な原材料を生産している。

今回の訪問では、日本精化の事業内容、化粧品が消費者の手に届くまでの流れにおける同社の役割を詳しく教えてもらった。これは、これから就職活動をする学生にとって、企業のつながりを理解する貴重な学びとなった。

説明の後は、日本精化が開発した原料を使ったクリーム、化粧水及びティントグロス、これら 3 種類の化粧品作りを体験した。

実際に原料を混ぜて化粧品ができていく過程はとても面白く、完成した化粧品を肌につけて感触を確かめることで、配合による違いを実感できた。

大学の研究室とは異なる企業での開発現場を間近で見られたのは、非常に貴重な経験。今回の訪問を通して、化粧品が私たちの手に届くまでに、多くの研究と努力が詰まっていることを改めて実感した。

白衣を着て化粧品作りを実践

【 環境共生学科 】
グッドホールディングス株式会社及び株式会社リヴァクスを訪問

6 月 26 日（火）、環境共生学部の学生たちがフィールド・環境施設実習の一環として、グッドホールディングス株式会社（西宮市鳴尾浜、産業廃棄物のリサイクル、撤去及びリユースなどの事業を展開するホールディング会社）および株式会社リヴァックス（西宮市鳴尾浜、産業廃棄物・特別管理産業廃棄物の収集運搬及び飲料系商品のリサイクル企業）を訪問して教室での学びと環境産業の実際とを有機的に理解する

機会を得た。

今回の見学では、バイオガス発電のしくみについて学ぶことができた。廃棄物処理の工程やバイオガスを利用した発電システムの詳細について、社員の方々から丁寧なご説明をいただいた。また、現場で働く方々との質疑応答を通じて、環境産業におけるリアルな課題ややりがいについても深く理解することができた。

現場では、本学の卒業生も活躍しており、学生たちは先輩から直接、仕事内容や社会人としての経験談を聞くことができた。大学での学びがどのように仕事に活かされているのかを知ることができ、大きな励みとなったようだ。

見学後は、学生たちがグループに分かれ、「企業向けにメタンプラントをPRするにはどうすればよいか」というテーマで企画を立案し、発表を行った。それぞれのグループが、施設の特徴や社会的意義を踏まえた創意工夫に富んだ提案を行い、実践的な学びを深める貴重な機会となった。

本実習を通じて、教室では得られない“現場の環境共生”に触れることで、持続可能な社会に貢献するための視点を広げることができた。今後も環境共生学部では、実践的な学びの場を積極的に取り入れ、学生の成長を支援していく。

実際のプラントを前にその迫力に圧倒される

パイプでつながれた各施設の工程上の役割の説明を受ける

【 看護学科 】

「老年看護学Ⅱ」の授業で、高齢者交流と高齢者疑似体験の 2 種類の演習を実施

4 月 17 日（木）、4 月 24 日（木）に 3 年生が「老年看護学Ⅱ」の授業で、高齢者に対する理解を深めるため高齢者交流と高齢者疑似験の 2 種類の演習を行った。

「高齢者交流」では、ご協力いただいたシルバー人材センターの会員様との交流を通して、生きてこられた生活や時代の背景・価値観、身体的・精神的・社会的な変化がどのように自分自身にえいきょうするにか等を、単に知識としてではなく肌感覚で理解できるように取り組んだ。コミュニケーションの方法についても、「大きな声でゆっくり話す」等事前に準備・学習を行ってから演習に臨んだ。また、演習の締めくくりには、参加者の皆さんから看護職を目指す学生へ温かい励ましのお言葉をたくさんいただいた。

「高齢者疑似体験」では、感覚器の機能低下（白内障、加齢性難聴、手指の細かな動作の低下）について、体験を通して学んだ。

白内障の視覚（水晶体が黄色く濁り黄色に見える）が体験できるゴーグル、老人性難聴が体験できるイヤーマフ、末端神経が鈍くなる(思うように手指が動かない)のを体験できるグラブを装着し、高齢者の感覚を体験した。今普通にできていることが思いのほか大変であることを実感し、高齢者の看護を考える上で、重要な体験となった。

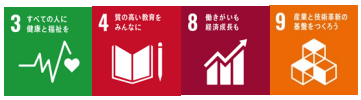
どちらの演習も、楽しみながら自然と学びが深まった。ご協力くださいました西宮市シルバー人材センターの会員様にお礼を申し上げる。

高齢者交流で実際のコミュニケーション方法を学ぶ

ゴーグル、イヤーマフ、グラブを付けて高齢者疑似体験

【 経営学科 】

学生たちが考案したパズル型のレターセットが発売され、体験ワークショップを開催



経営学科高橋ゼミの４年生３人（井澤さん、船路さん、松田さん）が考案したパズル型のレターセット「Pazulette（パズレッタ）」を体験するワークショップが母の日の５月 11 日（日）、ららぽーと甲子園で行われ、多くの人で賑わった。

「Pazulette」は、点線に沿って切るとパズルのピースのようになるイラスト付き便箋に手紙を書き、受け取った人がピースを組み合わせて手紙を完成させるという、遊び心が詰まった体験型手紙。「デジタル時代だからこそ、手書きの温かみを再発見してもらいたい」という学生たちの想いから生まれ、大阪書籍印刷株式会社とのコラボレーションで商品化に至った。

便箋は緑、青、黄色、ピンクの４種類、それぞれにクリームソーダ、ガラスの靴、ショートケーキ、花束がイラストで描かれている。来場者は好きな色柄を選び、メッセージを書いてスタンプや色鉛筆でデコレーション。これを点線に沿ってピース状にし、封筒に入れてシーリングスタンプで封をする。

会場には郵便局員も出張し、当日限定のオリジナル消印や特設ポストで会場を盛り上げてくれた。「通りがかりに見て参加した」という家族連れや、「イベント情報で見た」という人などで大盛況。

父親と来た５歳の女の子はピンクのセットで「パパに手紙を書いた。スタンプを押すのが面白かった」、小学２年生の女の子は「3 通書いた。誰に出したかはナイショ」とにっこり、ピンクの特設ポストに投函していた。

便箋のイラストは本学 OG でイラストレーターの藤浪桃子さんが担当。学生が Instagram でイラストを見つけ、DM を送った相手が偶然 OG の藤浪さんだった。会場にも駆け付け、「学生たちの意見を取り入れながらパーツを考えました。思いがけず後輩とコラボできてうれしい」と笑顔で見守っていた。

井澤さんは「子ども連れの家族、一人で来る人や年配の人、お友達同士など、色んな人が参加してくれました。お父さんと子どもが子でママに手紙を書く姿も。楽しかった、という声が聞けてよかったです」と話していた。

運営した学生とピンクの特設ポストに投函する参加者

【 共通教育部 】
「新しい自分発見イベント」で警察の仕事に触れる

学生が自分の興味関心に気づき、未来を考えるヒントにする「新しい自分発見イベント」（共通教育部主催）が 7 月 8 日（火）、大阪府警察本部の職員を招いて図書館 2 階のグローバルスタジオで開かれた。

イベントには、学年や学科の枠を超えた 27 名が参加。うち半数近くが 1 年生で、将来への高い意識がうかがえた。

当日は、警察官や警察行政職員の業務紹介のほか、女性の働きやすさに配慮した職場環境について説明があった。また、指紋採取体験や、実践的な護身術の指導もあり、学生たちはペアになって真剣かつ楽しそうに取り組んだ。

本学 OG の警察官・警察行政職員も来校し、学生にとって警察の仕事をより身近に感じる貴重な機会にもなった。学生からは「警察の仕事に対するイメージが変わった」「就職先として真剣に考えるくらい興味を持つことができた」といった声が寄せられた。イベント後のアンケートでは、学内で警察官の採用説明会を希望する声が多くあり、今後実施を検討していく。

指紋採取体験

実戦的な護身術の指導

高大連携

学部横断事業

【 健康・スポーツ科学科/食創造科学科 】
鳴尾高校硬式野球部を対象に、学科横断型のクラブ活動支援を実施

本学では高大連携事業の一環として、教育提携校である兵庫県立鳴尾高等学校に対し、クラブ活動支援を継続的に実施している。

その一環として、鳴尾高校硬式野球部の選手たちに対し、健康・スポーツ科学科と食創造学科がそれぞれの専門的資源を活かし、学科横断でトータルサポートチームを編成するプログラムを展開している。

アスレティックトレーニング（健康・スポーツ科学科：中堀千香子准教授ゼミ）、メンタルサポート（健康・スポーツ科学科：田中美吏教授ゼミ）、栄養指導（食創造科学科：今村友美准教授ゼミ）といった多面的な支援により、実践的かつ現場に即した支援が可能となっている。

今回、その取り組みの一環として、本学栄養科学館にて身体測定会を実施し、体組成、骨密度、推定ヘモグロビン濃度、筋力（握力・下肢筋力）及びジャンプ能力（パワー）の項目を中心に選手の身体状況と運動パフォーマンスを把握した。

さらに食事調査もあわせて行い、今後は測定データと照合しながら、個々の選手に対してより実践的な栄養・コンディショニング指導を進めていく。

これらの測定・分析には、中堀ゼミおよび今村ゼミに所属する学生が主体的に参加。学生たちにとっては、大学で学んだ知識や技術を高校スポーツ現場に応用する貴重な機会となり、実践力の養成や将来の専門職理解の深化につながる有意義な学びとなった。

この取り組みが目指すのは、単なる競技力の向上にとどまらず、発育・発達段階にある高校生アスリートを、心身ともに健やかに次のステージへ送り出すためのトータルサポート。

スポーツ現場においては、食事量の調整のみならず、運動内容やライフスタイル全体を考慮した多面的な支援が求められる。今回も、トレーナー、メンタルトレーナー、管理栄養士など多職種が連携し、それぞれの専門性を融合させた支援が実現した。

野球部員に測定の方法と趣旨を説明する

測定の様子

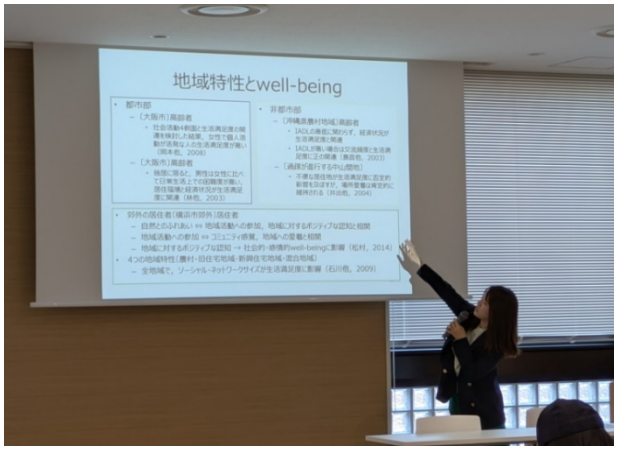
学部横断事業

【 生活環境学科 / 心理学科 】
「住環境×心理学でウェルビーイングを考える」生活環境学科で公開講演会実施

生活環境学科において５月１日（木）、「住環境 Well-being-心理学における定義と測定について－」と題し、生活環境２号館で、公開講演会が実施された。本学心理社会福祉学部心理学科の太子のぞみ講師が登壇。心理学における Well-being の定義や測定方法について解説し、住環境の Well-being について考えた。

13 学部 21 学科を擁する総合大学の幅広い知の領域を生かし、「学科の枠組みを越えた“知の交流”を促進しよう」と、生活環境学科の教員らでつくる「郊外住宅地と Well-being 研究会」（代表/三好庸隆・生活環境学科教授、共同代表/伊丹康二・同教授、メンバー/水野優子・同准教授、松原茂樹・大阪大学准教授、田中康裕・合同会社 Ibasho Japan 代表）が企画したもの。

研究会メンバーをはじめ、生活環境学科の教員、学生、心理学科からも参加があった。総合大学らしい領域を超えたテーマ設定により、いつもとは異なる有意義な”知と人脈”の交流の場となった。



太子のぞみ講師による心理学からのアプローチ

異なる学問領域からの説明に聞き入る参加者

学部横断事業

【 薬学科/看護学科 】
薬学科と看護学科との合同授業が本学で初めて実現

「多職種連携」を目的にした看護学科と薬学科の合同授業が７月７日（月）、本学で初めて実施された。多職種連携とは、医療や介護、福祉に関わる専

門職がコラボレーションして、多面的・多重的に患者さんへよりよい治療にあたろうとする考え方である。

看護科学館での合同授業には、看護学科 3 年生 90 人、薬学部 2 年生 114 人が出席した。「高齢者の高血圧症」「糖尿病と合併症」「脳卒中後のリハビリ」の 3 症例の中からグループごとに与えられた症例の問題点と連携ポイントについて意見を出し合いアプローチ方法について議論した。

学生たちは、血圧コントロールや食事療法に前向きに取り組んでもらうための方策や、自立に向けたリハビリテーションの重要性、薬の飲み忘れをどう防ぐかといった点について意見を交わした。学生は、看護師と薬剤師という職種によるアプローチの違いを肌で感じた様子。

看護学科 3 年生の中安穂乃佳さんは、「患者さんに対する薬についての説明、なぜ服薬が大事かを理解してもらう説明が参考になった」。同学科 3 年生の中川愛理さんは「患者さんの症状がよくなってほしいという思いは看護師も薬剤師も同じ。看護学科の私は薬剤師の視点を学ぶことができてとても新鮮でした」と話し、薬学科 2 年生の上田万結さんは「看護師は、退院後の暮らしといった『先』を見据えて動く。自分は、患者さんの『今』しか見えていなかったなととても重大なことに気付きました」。同学科 2 年生の鈴木絵里加さんは、「高齢の患者さんになると、認知機能が衰えてくるので、看護師だけでなくデイサービス担当者や管理栄養士との連携も必要なことが理解できてとても新鮮でした」と語っていた。

机を並べて授業を受ける薬学科と看護学科の学生

高大連携

【 経営科 / 本学附属高校等 】

産学連携プロジェクト「ローソンプロジェクト」で、学生と高校生が店舗建設候補地の明舞団地（神戸市・明石市）を視察

本学が株式会社ローソンと連携し、2050 年の未来社会の課題を解決し、地域創生を目指すコンビニエンスストアを構想する「ローソンプロジェクト」で、経営学部の学生と本学附属高校の生徒が、ローソン店舗建設候補地の「明石舞子団地（以下、明舞団地）」（神戸市・明石市）を視察した。

明舞団地は 1960 年から 1972 年にかけて開発された神戸市垂水区と明石市にまたがるニュータウン。明舞団地では、住民の高齢化や人口減少が進みつつあり、兵庫県などによる活性化に向けた取り組みが行われている。学生、生徒たちは団地再生に取り組んでいる兵庫県の担当者から講義を受けた後、5 月 28 日（水）には、SAP ジャパンのインダストリーシニアアドバイザー、浅井一磨さんが実施した明舞団地を活性化させるための解決策を導き出すためのデザインシンキングワークショップを受講した。

浅井さんは「参加した学生や生徒が自身の問題として捉え、団地周辺の人たちの顧客モデルを掘り下げる作業を進めた。現地視察により、課題の掘り下げや新しいアイデアの創出が期待される」と話している。

団地の視察は 6 月 18 日（水）に行われ、経営学部の学生（3 年）は、団地内のふれあい・コミュニケーションの場となっている「めいまい図書室」で、住民の高齢化など団地の現状、再生への課題などについて説明を受けた後、団地の視察を行なった。

現地担当者から「ローソン社が目指されるローソンタウン構想は、すでに存在するデジタル(先端技術)とアナログ(人の繋がり)をバランス良く融合させた現実的なもので、そこに学生の持つ視点や感覚が加味されて実現に至るなら、明舞団地のみならず

日本の社会課題へのアプローチモデルとして大きな価値とインパクトがあると感じる。今後ローソン社、団地居住者、学生の皆さんが同じテーブルで意見交換し、SAP 社のアイデアなどをブラッシュアップする場が調整出来れば、3 者及び将来の明舞団地にとって、有益であると感じました」と話した。

ローソンプロジェクトには本学学生、本学附属高校生徒のほか、洲本実業高校（兵庫県）、琴平高校（香川県）、相可高校（三重県）など本学と域学連携や包括連携を締結している県内外の自治体の高校の生徒も参加し、高大連携を進めていく。

プロジェクトを進める経営学部の谷口浩二助教は「このプロジェクトは、地域課題の発見とその解決策の創造を、教育の現場から実践していく新しい高大連携の形。企業の知見を学び、それを地域に活かす循環型の学びを通じて、“社会に関わる力”を修得できる。こうした現場での学びを踏まえ、『ローソン』店舗の構想に入る。自分たちのアイデアが形になることで、社会実装につながる力を養うことができると考えています」と話す。

めいまい図書館で団地の現状と課題の説明を聞く

視察後、課題の洗い出しとポジショニングを発表する高校生

大学間連携

【 薬学科 】

大阪・関西万博で、関西５大学による「健康・ウェルビーイング」に関する提案があり、薬学部 6 年の大黒香奈さんが登壇

大阪・関西万博の TEAM EXPO パビリオンフューチャーライフヴィレッジで 6 月 29 日（日）10 時から、関西の５大学（本学、関西大学、京都光華女子大学、甲南女子大学、森ノ宮医療大学）の学生による「健康・ウェルビーイング」に関するプレゼンテーションがあった。

薬学科 6 年の大黒香奈さんが所属するチームは、「非常時に誰でも美味しく食べられる非常食スイーツを作りたい」というもの。野菜ペーストなどを使った野菜ケーキや、一口サイズで分け合え、元気が出るカラフルな焼き菓子を非常食として作ってはどうか、と提案した。

「食べて体を維持するだけでなく、調理も楽しめて精神的に豊かさももたらせてくれる非常食」という提案も。「被災地では、温かい食べ物が人の心を和ませ、緊張をほぐします。日常を取り戻すような、大人も子供も楽しめる調理キットのような非常食があればいいのでは」というアイデアは、とても新鮮な発想。メンバーは、さらに「おいしさ」だけでなく、「楽しさ」も加えたいとアイデアを広げていった。そのほか、非常食が賞味期限切れにならない工夫として、部屋に飾りたくなるパッケージにするというアイデアもあった。

商品化には至らなかったが、非常食に対する柔軟な発想が目を引く発表だった。質疑応答では「家庭向けと法人向け、どちらを目指すのか」「値段はどれくらいを想定しているのか」など、熱心な質問があった。

大黒さんは「会場の皆さんからのフィードバックがたくさんあり、うれしかったです。非常食についての発表で、改めて非常食とは何かを考える機会にもなりましたし、アイデアを形にする難しさも感じました。ほかのチームの発表も、それぞれ個性が出ていて面白かったです」と満足そう。

2023 年秋から万博に向けて動いてきた関西 5 大学による連携プロジェクト。最後は、みんなでミャクミャクと一緒に記念撮影をして終了した。

聴衆にマイクを向ける大黒さん

ミャクミャクと一緒に記念撮影

【 甲子園会館 】

甲子園会館が大阪・関西万博に出展している「ミライ人間洗濯機」内部上映映像のロケ地に

4 月 13 日（日）に開幕した大阪・関西万博で「大阪ヘルスケアパビリオン」内に出展している「ミライ人間洗濯機」（製造元：株式会社サイエンス）の内部上映映像のロケ地に甲子園会館が登場している。

「ミライ人間洗濯機」は座るだけで心身が洗われる体験ができる入浴装置である。前回の 1970 年大阪万博に出展された「人間洗濯機」はその着眼点から大きな話題を呼んだが、今回はその進化版として注目が集まっている。

映像では、老夫婦がゆっくりとダンスを踊り始める。ダンスを舞うたびにその老夫婦が少しずつ若返っていく。その若返りに合わせてダンスもより若々しく、ダイナミックになっていくという展開を見せる。

甲子園会館が登場するのは、一連の動画の中で子どもがダンスをするシーンである。収録は 2024 年 5 月に行われ、西ホールとロビーが背景に使用された。

大きめの白い衣装をまとった男児と女児のダンサーが、監督の指示に沿って切れのあるヒップホップパフォーマンスを披露した。歴史的建造物である甲子園会館の重厚感との対比が目を引く印象的なシーンに仕上がっている。

映像は株式会社サイエンス「ミライ人間洗濯機」のブースで見ることができる。

ロケの様子

ヤングパフォーマーたち

【 リカレント教育センター 】

社会人の学び直しについて考えるフォーラムで、高橋千枝子センター長が講演

社会人の学び直しについて新たな可能性を探ろうと、リカレント教育イベント「大学リカレント共創フォーラム」（主催：ワークアカデミー）が 6 月 18

日（水）、新大阪のホテルで開催され、大学関係者ら約 100 人が対面、オンラインで参加した。

大学の事例報告として、本学リカレント教育センターの高橋千枝子センター長が「学びの生涯化を実装する―ＭＵＫＯnoa+の挑戦―」と題して講演した。

高橋センター長は 2023 年から開始した本学リカレント教育の取り組みについて紹介し、IT、DX を中心とした 150 講座を提供していること、本学教員による DX スペシャル講座を開講していること、キャリア支援を行っていることなどを具体的に説明した。また 3 年間を振り返り、「OG からの認知度が上がり、リカレント教育センターを利用する方が増えています。今後は本学オリジナル講座を増やしたり、20 代の若年層だけでなく、30 代以上の方も活用していただけるようにしたりしていきたい。また、利用者増加に向けて、他大学とも連携をしていきたい」と抱負を語った。

高橋センター長の講演

【 学内公認団体 等 】

国際ソロプチミスト西宮から「児童福祉研究部」に支援金

国際ソロプチミスト西宮の前谷美枝子会長らが５月２３日（金）本学を訪れ、「児童福祉研究部」に支援金を授与した。

「児童福祉研究部」は児童養護施設の訪問や視覚障がい者外出ボランティアに取り組んでおり、２００７年に国際ソロプチミスト西宮がその活動を評価して「Σ（シグマ）ソサエティ」に認証。以来、毎年、活動支援金などの後援を受けている。児童福祉研究部 部長の宇野里砂教授(教育学科）も参加した授与式では、前谷美枝子会長が「児童福祉研究部」を代表して蓼原侑香さん（心理・社会福祉学科４年）と福井里帆さん（心理学科３年）に支援金の金封を手渡し、日ごろの活動をたたえた。

前谷会長は「若い人に奉仕する心を持ってほしいと思い、応援させてもらっています。」と話し、福井さんは「児童福祉研究部は、伝統が長くボランティアに興味のある学生が自発的に集まっている特徴のあるクラブなので、伝統を継承しながら頑張ります」と話していた。

国際ソロプチミスト西宮及び児童福祉研究部のメンバー

ダンス部がフランス・リヨンで開催中の「Camping 2025」に招待されダンスで国際交流

ダンス部がフランス・リヨンで 6 月 27 日（金）まで開催中の「Camping 2025」に招待され、6 月 16 日（月）から 1 週間、レッスンやワークショップ等に参加した。

「Camping」はパリに拠点を置く CND 主催のダンスや演劇、パフォーマンスなどのフェスティバル。17 年目となる今年はリヨンで 6 月 16 日（月）から 27 日（金）まで開催された。毎年、ダンス教育に貢

献している世界中の高等教育機関 30 校が招待を受けており、本学ダンス部は今年初めて招待された。

本学ダンス部の学生たちは授業の関係で 1 週間だけの参加となったが、毎朝のレッスン、午後は振付師によるワークショップ、夜に行われるダンス公演鑑賞など充実したスケジュールをこなした。

Camping はプロのダンサーたちとの創作過程を共に行うことによって、学生たちの国際交流と未来のダンス専門家の育成に力を入れている。中でも学生同士の交流・学び合いに焦点を当て、毎朝、学生が輪番で指導役となってレッスンが行われる。

6 月 20 日（金）は本学ダンス部が「なぎなた」の所作からヒントを得たレッスンを考案し、指導を担当した。南中ソーランを世界各国から集まった参加者全員に教え、最後には「どっこいしょ！どっこいしょ！」の掛け声の大合唱と共に踊り、盛り上がった。

本学の学生が指導役に

南中ソーランで参加者全員が盛り上がる

ブラウンライスボランティアが、WTW 大阪を第 1 回目からボランティアとして運営をサポート

5 月 18 日（日）万博記念公園にて「WFP ウォーク・ザ・ワールド for アフリカ　2025 大阪」が、新緑、バラが咲き誇る中開催された。ブラ★ボラは、WTW 大阪第 1 回目からボランティアとして運営をサポートし、また、最低のスタッフ数を残して、ウォーキングにも参加して支援に寄与していく。

ブラウンライスボランティアのメンバー

【 武庫川女子大学 】
キッザニア甲子園を企画・運営する KCJ GROUP と包括連携協定を締結

本学は 5 月 21 日（水）、キッザニア甲子園を企画・運営する「KCJ GROUP 株式会社」（東京都中央区）と、包括連携協定を締結した。教育、文化、スポーツでの協力や、人材育成などで協力していく。

締結式で、髙橋享子学長は、「子どもたちの探究心に応える新しい教育プログラムや大学生の実践的な学び、地域社会への貢献など、多岐にわたる連携活動が可能であると確信している。未来の子どもたち、夢のある子どもたちの背中を KCJ GROUP と一緒に力強く後押しできることは本学の喜び。協定締結が連携の第一歩となる」とあいさつ。

KCJ GROUP 株式会社の圓谷道成代表取締役社長は、「2009 年のキッザニア甲子園の開業当初から、場所が近く、武庫川女子大学の学生の皆さまとは交流がある。せっかくの機会なので、今まで以上のアウトプットを出していきたい。互いに協力して、新しい取り組みを次々に出していきたい。すべての子どもたちに最高のエデュテインメント体験を提供することで、豊かな未来社会に貢献していきたい」と期待を込めた。

KCJ GROUP からは、大阪・関西万博の「こどもミライ祭り」（8 月 7 日（木））で、本学の学生と大阪府

内の特別支援学校に通う児童・生徒らが協力し、「インクルーシブダンス」を披露することも発表された。創作ダンスを学ぶ佐藤彩音さんと山本有希さん（いずれも健康・スポーツ科学科 4 年）たちが、「TEAM EXPO Dance アンバサダー」に任命され、これから本番当日に向けて豊永洵子講師（スポーツマネジメント学科）のもと、振り付けを考えていく。締結式後には、取り組みに参加する学生とキッザニア甲子園のダンスチーム「Zany8」が、コブクロが歌う万博オフィシャルテーマソング「この地球（ほし）の続きを」に合わせて踊りを披露。アンバサダーに就任した佐藤さんは「大舞台で思い出に残るダンスを作りたい」といい、山本さんは、「一人ひとりが主役になれるステージにしたい」と抱負を語った。

調印式を終えた圓谷社長、高橋学長及び関係者

インクルーシブダンスを披露

【 女性活躍総合研究所 】

・ジェンダーを超えて未来を拓く！キッザニア甲子園で MUKOJO ミライ☆ラボ「Girls' Day/Boys' Day」開催

将来の仕事、職業をジェンダーの視点から考えてもらおうと、キッザニア甲子園（西宮市）で 5 月 24 日（土）、特別プログラム「Girls' day/Boys' day」が開かれた。キッザニア甲子園と本学女性活躍総合研究所が取り組む「MUKOJO ミライ☆ラボ」の共同企画で、5 月 21 日（水）に締結した包括連携協定の一環で実現した。

性別にとらわれない職業選択のため、ドイツで始まった「Girls' day」は、これまで男性が多く活躍してきた分野の職業を女子生徒が体験するもの。「Boys' day」は、これまで女性が多く活躍してきた分野の職業を男子生徒が体験する試み。「Girls' day/Boys' day」は、ドイツの先進的な試みをキッザニア甲子園で実現させた特別プログラム。

「Girls' day/Boys' day」には、小・中学生 7 人が参加。はじめに、本学女性活躍総合研究所の長谷川裕紀副所長が、「看護師」「警察官」「学校の先生」などについて、男女どちらのイメージが強いかを尋ねた。次に、なぜそんなイメージになるのかを聞きい。参加者からは、「病院で、女性の看護師さんを見るから」「テレビドラマで、男性警察官が活躍するから」といった発言があった。長谷川副所長は、「無意識のうちに性別による職業選択のイメージができあがっていく。今日はキッザニアに来ても普段は体験しない仕事を通して、仕事・職業とジェンダーについて考えてみましょう」と呼びかけた。

男子児童は、「キャビンアテンダント」「看護師」「介護士」「食品開発者」の仕事を体験。新生児室で赤ちゃんそっくりの人形を沐浴させたり、着替えさせたりした男子児童は、「病院で赤ちゃんの世話をするのは、男も女も関係ないと思いました」と話した。女子児童・生徒は、「自動車整備士」「パイロット」「消防士」「すし職人」の仕事を体験。自動車整備士として、ナットを締めたり、タイヤを外したりした女子生徒は、「男性の仕事と思っていたが、女性にもできる仕事だと思いました」と語った。

体験後には、長谷川副所長から、スイスの非営利財団「世界経済フォーラム」が公表した「ジェンダー・ギャップ指数」（2024 年）で、日本の順位が 146 か国中、118 位であることや、政治・経済分野で、男性に比べ女性の割合が低いことが説明された。日本におけるジェンダー・ギャップの大きい職

業の例として、保育士や看護師は男性の割合が 1 割以下であること、航空機操縦士や消防士は女性の割合が 1 割以下であることが紹介された。最後に、「もし、今まで男性（女性）ばかりだった仕事に女性（男性）がたくさん増えたら、どんな良いことがあると思いますか？将来の仕事・職業について、興味・関心の幅を広げて、より多くの選択肢から考えてみましょう」というメッセージが投げかけられ、プログラムは終了した

消防士を体験する女子

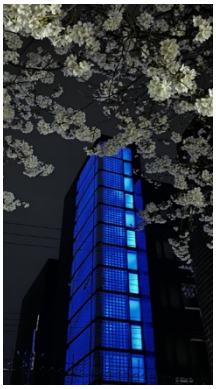
新生児の世話を体験する男子

【 臨床教育学研究科 】

・研究所棟をライトアップする「Light It Up Blue MUKOJO! 2025 ～武庫女を青く照らそう～ 」を開催

4 月 2 日（水）は国連で定められた「世界自閉症啓発デー」。4 月 2 日(水)～8 日（火）の発達障害啓発週間には、自閉症をはじめ発達障害に理解を深めようと、世界中で主なランドマークが青くライトアップされる「Light It Up Blue（LIUB)」が行われる。

本学でも 2019 年度から毎年、「Light It Up Blue MUKOJO!」として開催しており、今年も中央キャンパス研究所棟を 4 月 2 日（水）～8 日（火）18 時～21 時の日時でブルーにライトアップした。



ライトアップされた研究所棟と世界自閉症啓発デーの案内

本稿の記事は本学 WEB サイトの NEWS 及び学科オリジナル HP をもとに作成しています。写真はすべて本学 WEB サイト掲載済のものです。

ご意見・ご質問等は、本館 5 階　社会連携推進課まで
担当：成田・安藤(6214)
E-mail: shakai@mukogawa-u.ac.jp

持続可能な開発目標（SDGs）の詳細

国際連合広報センターHPより引用
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/sustainable_development_goals/

あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる

飢餓を終わらせ、食糧安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する

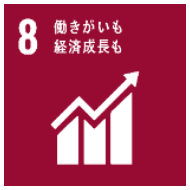
あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する

すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し生涯学習の機会を促進する

ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女児の能力強化を行う

すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する

すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する



包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する

強靭（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る

各国内および各国間の不平等を是正する

包摂的で安全かつ強靭（レジリエント）で持続可能な都市および人間居住を実現する

持続可能な生産消費形態を確保する

気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる

持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。

持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する

持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する